

# ディキンソンの “I taste a liquor never brewed—”

——エミリーは魔女だった？——

萱 嶋 八 郎

## 1

アラン・テートは、その「エミリー・ディキンソン論」を、

Cotten Mather would have burned her for a witch.<sup>(1)</sup>

と言う、真に印象的な言葉で結んでいる。彼の論文の最後の言葉は「魔女」(“witch”) であるが、この小論では、この「魔女」と言う言葉をアラン・テートの文脈とは全く異なった文脈の中に置いて、考えて見たいのである。最初に No. 214 の詩、 “I taste a liquor never brewed—<sup>(2)</sup>” を再検討して見たい。

私は決して醸造されることのないお酒を、  
真珠にほった大コップから飲むのです。

↑ どんなフランクフルトの穀粒も、  
そのようなアルコールを産み出しません。

私は空気の飲んだくれ、  
露の放蕩者です。

溶けた青色の飲み屋から、千鳥足で  
終わりのない夏の昼を通り抜けます。

“飲み屋の亭主” が酔っぱらった蜂さんを  
ジキタリスのドアから閉め出す時、  
蝶たちが、“チビチビ飲む”のをやめる時、

私は更にたくさん飲むだけです。

ついに天使たちが、雪のように白い帽子を振り、

聖徒たちが、窓まで走ってきて、

† マンザニラをかきやってきた、

かわいい酒豪を見るのです。

---

† ライン川沿岸の大樽は、

† 太陽によりかかった

I taste a liquor never brewed—

From Tankards scooped in Pearl—

† Not all the Frankfort Berries

Yield such an Alcolol!

Inebriate of Air—am I—

And Debauchee of Dew—

Reeling—thro endless summer days—

From inns of Molten Blue—

When “Landlords” turn the drunken Bee

Out of the Foxglove’s door—

When Butterflies—renounce their “drams”—

I shall but drink the more!

Till Seraphs swing iheir snowy Hats—

And Saints—to windows run—

To see the little Tippler

† From Manzanilla come!

---

† Vats upon the Rhine

† Leaning against the—Sun—

従来のこの詩の読み方については、大別して二つに分けられるであろう。一

つは Charles R. Anderson のように、この詩を R. W. Emerson の詩, “Bacchus” のパロディと考えるか、または同じく Emerson の “The Poet” の詩人論を忠実になぞった詩と見るかである。いずれにしても、Emerson の、詩人は詩を如何に産み出すかと言うことと、関連して理解しようとしているのである。しかし、詩の中の「私」が詩人であるとは明言していない。この「私」が何故「真珠にほられた大コップから」(“From Tankards scooped in Pearl—”) お酒を飲まねばならないのか、それが何故「真珠」でなければならないのか。私は「お酒」(“a liquor”) を飲んでいのに、何故「空気の飲んだくれ」(“Inebriate of Air—”) であり、「露の放蕩者」(“Debauchee of Dew—”) であるのか。どうしてそれに「ジキタリス」(“the Foxglove”) が飲み屋なのか、ここに何故「蜂」(“Bee”) や「蝶たち」(“Butterflies”) が必要なのかなどなどについて説明がつかないのである。また、このような道具立てが、どのような効果や意味を持つかについて説明が与えられないのである。従って、この小論では、視点の角度を少し変えて、この詩のイメージの再吟味を試みたいのである。

## 2

この詩を一読した時に連想させるものは、シャーマンのエクスタシー体験(脱魂忘我の状態)である。シャーマンのエクスタシー体験を特徴づけるものは、第一に「上昇体験」もしくは「下降体験」、魂が身体を脱け出して、死者の国へ旅することである。第二にそれは「憑霊現象」である。ヨーロッパの魔女伝説で何故魔女が箒に乗って空中を飛ぶ伝説が一般化したのかについては、カルロ・ギンズブルグ氏の膨大な資料の綿密な分析に基づく推論がある。ギンズブルグ氏は魔女迫害は、キリスト教以前にヨーロッパに広く存在していて、中世末期までなお残存していた、古代宗教に対する迫害であるとの前提のもとに、キリスト教が普及する以前に、ヨーロッパ人は、ユーラシア大陸で、シャーマンの宗教を奉ずるツングース系の民族と接触し、その宗教の影響を受けたことを丹念に資料を調べて、推論している。シャーマンのエクスタシー現象が

人類の普遍的な心理現象であるのか、特定の宗教の下でしか起こらないものであるのかについては、議論の分かれるところであるが、シャーマンの憑霊と上昇——エクスタシーの状態での死者の国への旅を念頭において、この No. 214 の詩を再読する時、この詩の今まで見えなかった側面が明らかになる筈である。

### 3

この詩は先ず、憑霊現象を、アルコールによる陶酔のイメージによって表現する。「私は決して醸造されることのないお酒を～飲みます」 (“I taste a liquor never brewed—”) と、「私」 (“I”) と言うとき、この「私」が「飲むお酒」 (“taste a liquor never brewed—”) が、文字通りのアルコール飲料でないことを最初に断っているのである。その「お酒」を、「真珠にほられた大コップ」から「私は～飲む」。最後の晩餐に用いられ、アリマタヤのヨセフがキリストの血を受けるのに用いた聖杯 (the Holy Grail) は、ダイヤモンドかエメラルドで出来ていたと中世の伝説は伝えている。一方預言者エレミヤは諸国民を酔わせるバビロンを黄金の杯 (a golden cup) にたとえている。伝説のダイヤモンドかエメラルドの聖杯であれ、エレミヤのバビロンの隠喩の黄金の杯であれ、その中に入っているお酒はワインである。前者のワインは諸国の民に救済と生命をもたらすキリストの血を表象し、後者のワインは諸々の国民に神の審判と破滅をもたらす悪を表象する。「真珠」は再生のシンボルであり、天国を表象し、終末の後の新天新地の出現の後の、未来のエルサレムは、門が真珠で出来ていると言う。この「真珠」をほって出来た「大コップ」 (“Tankards”) は、炭酸の逃げない蓋付きの大杯である。従って「私が～飲んだ」と第1行で断ったお酒は、ビールの類の飲物であることが連想される。「聖霊降臨祭のビール」 (“White Sunday Ale”) とあるように、ワインがキリストの血——キリストの死と贖罪を表すのに対して、ビールは聖霊の降臨を連想させる。キリストの再生と昇天に次ぐ、ペンテコステの日の聖霊の、使徒やキリストの弟子たちへの降臨を考えると、真珠の大コップに盛られたビール

は、キリストの再生と昇天と聖霊の降臨と天国への上昇を表象し、その「酒」を「私」が飲むことは、キリスト及び使徒・弟子たちと「私」が一体となったことを連想させる。更に蓋のついた杯は、人の心臓を表すとすれば、「真珠にほられた大コップ」に盛られた「酒」は、再生された心が神の霊を受けたことを意味する。酒は、アルコール (spirit, 霊) と水からなっている。水はまた再生させる力を持っている。この「大コップ」は“Tankards”と複数である。ここで、「私」が常習的に過度にこの酒を飲んでいることが暗示されている。

「どんなフランクフルトの穀粒も／そのようなアルコールを産み出してしません」 (“Not all the Frankfort Berries / Yield such an Alcohol!”). Thomas H. Johnson は、ディキンソン全集のペーパー・バック版では「フランクフルトの穀粒」の代わりに、異文の「ライン川沿岸の大樽」 (“Vats upon the Rhine”) を採用している。いずれにしても「フランクフルト」と「ライン川」とそれぞれドイツの地名が出てくることは、ドイツ観念論からも、ドイツ観念論の影響を受けたアメリカの超絶主義からも、「私」の陶酔が生まれたのではないことを暗示している。「穀粒」 (“Berries”) は即ち小麦・即ちパン・即ちキリストの人性と結びつく。一方「大樽」 (“Vats”) は、木製で、木製の樽は人の身体を表す。「私」が「真珠の大コップ」から味わって、「私」を酔わせた「お酒」は、天から降臨した霊であって、人間に発する、人間の工夫した観念や論理や学問体系や教えから産み出されたものではないことを述べている。

第2節が、「私は空気の飲んだくれ、／露の放蕩者です」 (“Inebriate of Air —am I— / And Debauchee of Dew—”) と始まるときに、第1節と第2節の間に甚だしい断絶・飛躍が感じられる。第1節で「私」は「お酒」に酔っていたのに、第2節では「空気」 (“Air”) と「露」 (“Dew”) に酔う者となっているからである。「空気」が動いたものが風である。風は神の霊・ロゴスを表す。また人の口が空気を動かせば息となる。そして息は生命や神の霊、創造の<sup>00</sup>霊を表す。空気・風・息と言う一連の言葉は、神の霊・生命・ロゴス・創造の霊を表す。一方「露」は死者を再生させる神の霊の比喻に、預言者イザヤ

は使っている。<sup>129</sup>「飲んだくれ」(“Inebriate”)は常習的に酩酊する者であり、「放蕩者」(“Debauchee”)は、過度に酒を飲む者である。第1節の「お酒」も、第2節の「空気」も「露」も、意味するものは「神の霊」である。神の霊が繰り返し、常習的に、過度に、「私」に降ってきて、私をエクスタシー・脱魂忘我の状態に導いたのである。この神の霊による陶醉は、「私」の魂を天に上昇させる。

「溶けた青色の飲み屋から、千鳥足で／終わりのない夏の昼を通り抜けます」(“Reeling—thro endless summer days— / From inns of Molten Blue—”)。「青色」(“Blue”)は勿論神の在す天を表す色である。しかしこの天は普通の空ではない。「溶けた」(“Molten”)「青色」である。それは火によって「熔け」、鑄造し直された空である。新約聖書の預言は終末の時に、現在の天は「燃えくずれ」、<sup>130</sup>「新しい天」が出現すると言う。「私」の再生した魂は、終末の新しい天を出て、更に上昇を続けて行く。この新しい天が道端にある「飲み屋」であるのは、作者のユーモアである。しかし新しい天は、魂を更に酔わせる所でもある。そこを通過することを許された者だけが、更に神秘の奥義を知ることが許されるのである。ここにきて、「私」は、魔女の如く、空を飛行する者であるが、魔女ではないことが明らかになる。魔女は暗黒の夜の空を飛ぶものであるが、「私」は光輝く「夏の昼」の空を飛翔する。魔女の住む世界が死と寒冷と影と暗闇の不毛の冬の世界のイメージとすれば、「私」の飛ぶ世界は、光と熱と生命とに溢れた夏の世界である。しかもこの夏の昼は「終わりが無い」(“endless”)のである。この「私」の飛んでいく世界には、一日の循環も季節の循環もない永遠の世界である。

空中を「千鳥足で～通り抜ける」時、「私」は、魔女のように身体ごと空中を浮遊しているのであろうか。それともシャーマンのように魂が身体を離れて、魂だけが空中を飛んで行くのであろうか。「私」は「真珠にほった大コップから」飲んでいて。小さな真珠をほって作ったコップが大コップであるので、その小さなコップから飲んだもので、酩酊する「私」は、極めて小さなものであると推定できる。「私」は第3節の「蜂」(“Bee”)や「蝶たち」(“Betterflies”)の仲間であるので、このことから「私」のサイズが小さい

ものであることが推論できる。シャーマンの魂は、鳥になって飛んで行くと言う<sup>66</sup>。この小さいことから、「私」の魂だけが身体を脱け出して空中を上昇していると考えられる。

「“飲み屋の亭主”が酔った蜂さんを、／ジキタリスのドアから閉め出すとき」(“When ‘Landlords’ turn the drunken Bee / Out of the Foxglove’s door—”)と「私」が言うとき、「ジキタリス」(“the Foxglove”)は、民間伝承に従って、死者の霊の宿るところであろう。当時ニュー・イングランド地方では法律によって、飲み屋の主人は、酔っぱらった客は店の外に閉め出さなければならなかったと言う。「蜂」(“Bee”)は、キリスト教の象徴体系の中では、キリストを指す場合があるので、「ジキタリスのドアから閉め出された」この「酔った蜂」は、キリストが死んで墓に葬られた後、三日目に墓から再生したことを指すものと考えられる。従って、この「蜂」が「酔っぱらっている」(“Drunken”)のは、イエスがバプテスマのヨハネからバプテスマを受けた時、神の霊が下って、そこにとどまったことを指すものであろう<sup>69</sup>。死者の国を出たキリストは、地上で弟子たちに顕現した後、天の国へ昇って行く。「ドア」(“door”)は死の国の入口にある。「ドア」から出たのは死の門から、「蜂」が立ち去ったことである。ここで「飲み屋の亭主」(“Landlords”)は、死の国を支配する悪魔であるよりは、複数であるので、神の霊をもって酔わせる、三位一体の神を指すものであろう。

「蝶たちが、“チビリチビリ”飲むのをやめる時、／私は更にたくさん飲むだけです」(“When Betterflies—renounce their ‘drams’— / I shall but drink the more!”)。「蜂」がキリストであるとするならば、「蝶たち」(“Butterflies”)は、人の魂を表す。地上の信心深い人達は地上で神と一体となる神秘的体験をする。18世紀のジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards) の大覚醒運動と、モラヴィラの敬虔派の影響を受けたウエスレーのメソジストの運動は、信仰の始まりの、神秘的な回心体験、聖霊によるバプテスマを重視した。しかし一般的にニュー・イングランドのキリスト教会では神と人が交流し、合一するという神秘主義的側面が、それ以上に強調されることは乏しかっ

た。「蝶たち」は「チビリチビリ飲む」だけでやめてしまったのである。一方「私」はそれを更に一層進めていく。つまり「私」の上昇は限り無く進められていく。

「ついに、天使たちが雪のように白い帽子を振り」（“Till Seraphs swing their snowy Hats—”）とあるように、「私」は最後には「天使」のいる死者たちの国に到達する。「酒」を更にたくさん飲むことは、神秘的体験を更に深めることである。それは遂にはシャーマンのように天空を高く上昇し続ける。憑霊と上昇は一つの事の二つの側面である。「天使たち」（“Seraphs”）が手にしているのは、「雪のように白い帽子」（“snowy Hats”）であり、それを振って「私」を歓迎してくれる。「雪」は冬の世界を表すと共に、冬の大地を暖かく守って、種子を保護して、種子が春の到来と共に再生するのを助ける。「白さ」は死の色であると共に、無垢の色である。白い服は死者の服であると共に、キリストが死から生き返った時の服であり、殉教者が与えられる服でもある。<sup>66</sup>「帽子」が換喩的に頭——心を表すとすれば、「天使たち」が死者の国に到達した「私」を「死」と共に「再生」をもって迎えてくれたことを意味する。「私」はやがて「死者」の国から再び新しく生きる者として、送り返されることを暗示する。「聖徒たちが窓まで走ってきて」（“And Saints—to windows run—”）とあるように、死者である「聖徒たち」は、それぞれの「窓まで走ってくる」が、「私」と死者たちとの直接の交流は出来ない。ここで「私」は魔女でもなければ、シャーマンでもなく、降霊術師でもない。死んだ「聖徒たち」は、「マンザニラから来た／小さな酒豪を見る」（“To see the little Tippler / From Manzanilla come!”）だけである。Thomas. H. Johnson は、ペーパーバック版では、異文の「太陽にもたれている」（“Leaning against the—Sun—”）を16行目に採用している。「マンザニラ」（“Manzanilla”）はシェリーの一種のマンザニラ酒の町からとでも解すべきなのであろうか。それとも Thomas. H. Johnson が三巻本の全集の No. 214 の詩の下で指摘しているように、キューバ島の港町、ラム酒の輸出港であるマンザニロ（Manzanillo）と結び付けて考えるべきなのであろうか。赤いワインがキリストの死と結びつ



くならば、白いワインであるマンザニラ酒はキリストの再生と結びつけるべきであろう。ここで、最初の「酒」はビール・ワイン・ラム酒のいずれとも考えられることになり、つまり地上の酒の中のどれでもないことが明らかになったのである。「太陽にもたれている」の異文を採用すれば、それは「太陽」を街灯に見立てた、ユーモラスな表現となる。「私」は最終的には「太陽」——伝統的にキリストの象徴とされてきた——にもたれかかることは、「私」とキリスト・神との一体化、即ち神人合一の神秘的体験が完成したことになる。エクスタシーの絶頂に達したことになる。

#### 4

「私」が死者の国から帰還して、その死者の国への旅の報告が、この詩である。最終的に「私」はシャーマンでもなく、魔女でもなく、「私」は死者の国へ旅して帰還することによって、新しく生まれ変わったのである。「私」がこの詩を書いていることは、「私」は死者の国の旅によって、一つの霊——新しい言葉、詩の言葉を持を帰ることで、「私」は詩人として新しく誕生したのである。

ディキンソンは「エクスタシー」及びその派生語を綴るのに、19語は“extasy”, “extatic”, “extasies” と綴っている。また18語は, “ecstasy”, “ecstatic”, “ecstatically”, “ecstacies” と正しく綴っている。“ex” と綴っているのは、全集の中では、前半で1872年の No. 1209 までである。一方“ecs” と正しく綴っているのは、1874年の No. 1327 以後である。これは勿論、単純なスペリングのミスで、1874年以後ディキンソンが誤りに気付いて、以後は“ecs” と書いたと考えられる。Thomas. H. Johnson はこれを単純なミスと考えたものと思われる。ペーパー・バック版では“ex”を全部“ecs”と正しく書き改めている。しかし作者に「エクスタシー」体験、シャーマンのような脱魂忘我の体験があったとすれば、“ex + tasy” → 「外に + 立つ」と魂もしくは意識が身体の外に立ったと言う意味を匂わせるための意図的なスペリングのミスと推定することは出来ないであろうかと思うのである。

この詩はシャーマンのように憑霊と上昇・死者の国への訪問を報告した詩である。しかし、その報告に当たって、「私」はその旅を深刻にならずにユーモアと諧謔をもって描いている。ピューリタンたちの基礎となったカルヴィン主義神学は、信仰の知的理解と知的同意を重んじて、宗教の神秘的体験に対して狂信的になることを恐れて、甚だ警戒的であり、神秘的傾向を持つクエーカーを迫害したりした。ジョナサン・エドワーズに始まる信仰覚醒運動は、モラヴィアの敬虔派の影響を受けたジョン・ウエスレーのメソジスト運動も加わることによって、信仰生活の出発点において、信仰者個人の回心の個人的体験と言う神秘的経験を重視したが、あわせて信仰者の意識的・意志的決断もまた重く見て、全体としては、生活の倫理的向上を結果として重視した。しかしキリスト教において、上昇と天国への旅が全く否定されているわけではない。使徒パウロは聖書の中で、そのような自らの体験を語っている。彼は「第3の天にひきあげられ」「パラダイスに引上げられ、人間が語ってはならない言葉を聞いた」と述べている。それは以下代々のキリスト教神秘主義者たちの体験でもある。しかし「私」は、神との合一と言う神秘的体験において、ピューリタンの許容範囲を越えてしまったのではないかと考えられる。従ってその体験を詩人として報告するに当たり、ユーモアと諧謔の中に韜晦し、憑霊を飲酒と表現し、二重、三重の象徴表現を通して、体験したひとつの真実を表現し、そのように防護することで、憑霊——即ち魔女と疑われることを避けたのではないかと推定したいのである。

この No. 214 の詩の統一したモチーフは、憑霊と上昇のモチーフである。そして死者の国から帰ってきた「私」は、死と再生を経験した者として、巫女のごとく、死者の言葉を語るのではなくて、詩人として、生まれ変わった者として新しい詩を語るのである。

#### 註

- (1) Allen Tate, “Emily Dickinson.” *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays*, ed. Richard B. Sewall (N. J.: Prentice-Hall, 1963) p. 27.
- (2) この番号は、トマス・H. ジョンソンの三巻本『エミリー・ディキンソン詩集』(1955)の作品番号を示している。以下同じである。作品は同詩集からの引用である。

- 但し、† 符合を付けた書き方は、R. W. Franklin 編の *The Manuscript Books of Emily Dickinson*, (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1981) による、ディキンソンの原稿の写真版を参考とした。
- (3) Charles R. Anderson, *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*, (New York: Doubleday, 1960) pp. 83~85.
- (4) 例えば、Kare Keller, *The Only Kangaroo among the Beauty; Emily Dickinson and America*, (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1979) p. 155.
- (5) シャーマンについては、ミルチア・エリアーデ著 岡三郎訳『神話と夢想と秘儀』（国文社、1972）  
I. M. ルイス著 平沼孝之訳『エクスタシーの人類学——憑依とシャーマニズム』（法政大学出版局）  
佐々木宏幹著『シャーマニズムの世界』（講談社学術文庫、1992）等を参考とした。
- (6) カルロ・ギンズブルグ著 竹山博英訳『闇の歴史——サバトの解説』（せりか書房、1992）
- (7) 旧約聖書『エレミヤ書』51章7節 以下聖書は日本聖書協会の口語訳聖書による。
- (8) 新約聖書『マタイによる福音書』13章45, 46節
- (9) 新約聖書『ヨハネによる福音書』21章21節
- (10) 新約聖書『ヨハネによる福音書』3章5節
- (11) 新約聖書『ヨハネによる福音書』3章8節  
旧約聖書『創世記』2章7節
- (12) 旧約聖書『イザヤ書』26章19節
- (13) 新約聖書『ペテロ第二の手紙』3章12, 13節  
新約聖書『ヨハネ黙示録』21章1節
- (14) ミルチア・エリアーデ 前掲書 P. 139。
- (15) 新約聖書『マタイによる福音書』3章16節
- (16) 新約聖書『ヨハネ黙示録』6章11節, 同7章13, 14節
- (17) 新約聖書『コリント人への第二の手紙』12章1~4節